

第169回 Child Abuse研究会

2019.12.14 / 大阪府社会福祉会館4階 / 参加者88名

テーマ：**男性・父親からの暴力について考える**
 ～脱暴力支援の取り組み～

講師：中村 正氏（立命館大学大学院 教授）



暴力をふるう父親への対応に関する研究と実践をされている中村正先生に、男親塾の取り組みについてお話いただいた。

暴力の問題：配偶者暴力、子ども虐待、高齢者虐待、いじめ、体罰などに対して、法律もできているが、我が国の加害者対策は遅れている。DV防止法では、被害者の対応は検討されている。しかし、加害者は被害者を分離するだけで、加害者対策をどうするかが検討されていない。加害者を処罰するだけでは人は変わらない。加害者対策として、加害者を処罰以外の何かが必要であり、加害者の男性をどのようにするか、男性性の問題として暴力への対応をいかにしていくかが課題である。

DVと虐待の関連：妻であり母である女性への暴力であり、加害者は妻に依存している。DVと子ども虐待は、対応省庁が違い縦割りになっている。虐待の問題は、母子の視点で考えるが男性の視点では考えられていない。離婚後の父子関係の問題、刑事司法の課題も多く、処罰だけでは繰り返してしまう。

これらの状況を踏まえ、法ができてはいるが介入、つまり罰だけではなく、問題解決型の司法にするにはどうしたらいいのか。まず、海外での更生のための命令制度、DVや虐待の場合の接近禁止命令の手続き、被害者心理に配慮し、加害者の行動を変えるためのアプローチ等が紹介された。

では日本ではいかに取り組んでいくか。1994年米国・脱暴力という発想で、暴力は学習したものの、それをそぎ落とす、脱暴力のための「男親塾」に取り組んでいる。「男親塾」の問題解決行動のグループワークの様子を、映像でわかりやすく紹介された。

DV例として、夫は妻を愛しているから殴るという矛盾、妻や子は自分のもの、他人ではない。暴力であることはわかっては加害が理解できない。むしゃくしゃしているから殴るが、誰でも殴っているのではなく、妻を選んでるのはなぜかを、その時の感情を言語化し、悲しさ、つらさなどの感情を表出させる。自分が人から見降ろされる体験をした時に、どう感じるか等をワークする。

虐待した親の例では、子どもが嘘をついたので叩いたというのは、他者に向けられた怒りである。この時に子どもを責めるのではなく、なぜそうした行動をとったか、なぜ子どもが悪いと思ったのか、なぜ腹がたったのか、自分のライフストーリーを通して内省化する。感情に気づき、どこで間違っていたのかを話し合っていく。

男性の問題を考えるうえで暴力は欠かせないテーマである。処罰では人は変わらない、加害者対策として処罰以外の何かが必要であるとの考え方から、「男親塾」について説明がなされた。暴力に悩む男性が集まり、自分のコミュニケーションや振る舞い方、考え方等、グループワークを行い成果をあげている。

さらに詳しいお話を聞きたいという多くの意見が寄せられた講演だった。



子どもの虐待ホットライン

平日午前11時～午後5時

06-6762-0088